

博士学位論文内容の概要および審査の結果の要旨

氏名	車 承 厚 (韓国)
学位の種類	博士 (文学)
学位記番号	甲第5号
学位授与の日付	平成7年9月13日
学位授与の要件	学位規則第5条該当者
学位論文題目	Abhidharmasamuccaya の研究
論文審査委員	主査 梶 山 雄 一 副査 香 川 孝 雄 副査 森 山 清 徹

論文の概要

この博士号請求論文は無著 (Asaṅga) 著 *Abhidharmasamuccaya* (=AS) の翻訳を基本とする研究論文である。第一部は AS 全体の翻訳を通して重要と思われた幾つかの問題点を六章にわたって考察した論文篇であり、それに付章として AS に説かれる「五位百法」の梵・藏・漢対照表が加えられている。第二部は、唯一の梵文写本に基づいて出版された二種の AS のテキストを用い、安慧 (Sthiramati) に帰せられる注釈書を参照しながら行われた AS の全訳と、これに従って整えられた詳細な内容目次 (科段) とより成っている。

第一部第一章「色法」において、論者は、表色の記述を通して考察した結果、一見 AS の内容は正量部の身表行動説に類似してはいるが、その根底には「外界の対象は唯だ識の表象にすぎない」という、いわゆる唯識無境の思想が存在していることを論じている。また法処所摂色を AS が設定することについては、瑜伽行派にとってもっとも重要な瞑想の対象を色法として主張するために説かれていることを明らかにしている。AS のこれらの理解の背景にも唯識無境の思想が存在していることはいうまでもない。そして法処所摂色を設定したために、色の定義において、色とは「こわれる」(rūpyate) からそういわれる、という解釈に加えて、「場所によって変異する」(pradeśena rūpaṇam) という新しい解釈をも説かなければならなかった、という事情を説明している。

第二章「心所有法」、第三章「心不相応行法」において論者はその各法を考察した結果、AS およびその注釈 (*Abhidharmasamuccaya-bhāṣya* = ASBh) の理解は、瑜伽行派独自の見解というよりも、説一切有部以外の他部派、とくに経量部の理論を受け継いでいるのではないか、という見解を明らかにしている。また心所法のうち、サマーディ (三昧) にたいする ASBh の解説は瑜伽行の実践を最も重要とする瑜伽行派の姿勢の現れにほかならないと論じる。

第四章「無為法」において、AS に説かれる不動と想受滅との二法は、説一切有部においては説かれないものであるが、それがここで説かれる背景には、瞑想の存在が考えられ、ここでも瑜伽行派が瑜伽行の実践を重要視していることが明らかになる。また三つの真如の内容は瑜伽行派が求める勝義、すなわち空性の存在を基盤としていることを論定している。

第五章「心・意・識」において、AS は一般の理解のように心・意・識を同義語として捉えず、三層の識（アーラヤ識・マナ識・前六識）を示すものであることを明らかにしている。それと関連して、AS に説かれるアーラヤ識の存在証明を解説する。これと関係して論者は、つぎの第六章において AS の「十二支縁起」解釈を紹介し、アーラヤ識の変化を「識の転変」の理論から解明している。論者は、同じ瑜伽行派のなかに異なった十二支縁起解釈が存在するのも、アーラヤ識の種子の解釈の相違によるものであることを究明している。

これらのことから、AS および ASBh が他の論書と異なる独自の見解をとる理由としてつぎの三つが考えられる、と論者はいう。

1. 瑜伽行の実践を理論的に説明するには説一切有部の解釈では限界があるために、従来の定説に改変あるいは付加がなされた。

2. 説一切有部の解釈を改変することによって、アーラヤ識を根拠とする唯識説を確立し、正当化しようとした。

3. 経量部の理論を受け継いだこと。これに関しては、L. Schimithausen 教授の「唯識二十論における経量部的前提」という論文に主張されているように、いままで一般に、弥勒、無著の作品においては経量部的の影響が見られない、と考えられていたことに訂正が必要であることを論者は提唱している。

論文審査の結果の要旨

論者は過去数年にわたって AS (Abhidharmasamuccaya. 阿毘達磨集論) のサンスクリット原典を、その注釈書 (Abhidharmasamuccaya-bhāṣya) および漢訳を参照しながら、日本語に全訳する作業を進めていたが、今回その和訳と、AS にあらわれる瑜伽行派のアビダルマ思想を分析した六篇の論文を添えて、学位請求論文として提出した。付論として添えられた、瑜伽行派の教義項目である「五位百法」の梵・藏・漢対照表も、またきわめて詳細な AS の内容目次(科段)も、論者の努力の結晶であって、大いに多とすべきものである。第一部の六篇の研究論文の執筆にあたっては、論者は、『相応部經典』や、『法蘊論』『識身論』『界身論』『品類論』『雜阿毘曇心論』『Abhidharmadīpa』そして『阿毘達磨俱舍論』『同積疏』などの説一切有部の諸論書はいままでもなく、『成実論』『成業論』などの小乗論書、『瑜伽師地論』『中辺分別論』『大乘五蘊論』『大乘百法明門論』『成唯識論』『同述記』『三十頌積論』などの瑜伽行派の諸論書をも広く参照して論を進めている。いま本論文の第一部すべてを論評することはできないが、六篇の論文のうち注意すべきいくつかについてコメントを加えることにする。

第一章第一節：AS における色法（物質的存在）の説明は説一切有部（以下、有部と略称）のものに準じているが、幾つかの特異なものがある。論者はそれらのうち第一部第一章第一節で表色・法処所摂色・色の定義の三点を取り扱っている。有部は表色（人の行動）を形色（顕色すなわちいろに対する形色すなわちかたち）に所属させるが、AS は表色を形色とは別に独立させて説く。論者は『瑜伽師地論』や『成唯識論』をも参照して、これは瑜伽行派が表色を「心の変化に従って起こる」点を強調したものであって、この派のいわゆる唯識無境の立場の現れであると論じる。この結論そのものは当然といえば当然のことであるが、それを AS の表色の解説において確認しておくことはやはり必要なことであろう。

第一章第二節：ここで論者は瑜伽行派の法処所摂色を扱う。AS は法処所摂色（知覚されないが心の対象となる物質的存在）として極略色（極微すなわち原子）・極迴色（空界・明・暗などの抵抗性のない物質の極微）・無表色あるいは受所引色（受戒によって引き起こされる習慣性）・遍計所起色（凡夫の心に現れる正・不正の影像）・定自在所生（すぐれた三昧によって起こる影像）の五種をあげる。このうち無表色のみは有部と共通するが、他の四種は有部で説かないものである。論者はこの瑜伽行派特有の四種の法処所摂色を ASBh、『瑜伽師地論』・『大乘法苑義章』などを参照して説明している。

第一章第三節：ここでは AS における色（物質的存在）の定義が検討されている。AS は色を（1）「接触によって変壞するもの」と（2）「場所によって変壞するもの」とに分けてそれぞれを定義している。前者は有部の定義と同種であるが、問題は後者である。この後者については論者は的確な解釈を提出していないが、「場所によって変壞するもの」(pradeśena rūpaṇam) とは、（1）の色が、抵抗性のあるものとの接触によってこわれるもの、を意味するのに対して、なんら抵抗物に触れなくても、ある場所に現れてはまた消えるもの、の意味であろう。さきに第二節で扱われた凡夫の散乱した心にあらわれる影像（幻覚）や、瑜伽行者の集中した心に現れる影像（瞑想のヴィジョン）などの法処所摂色を意味するのであろう。漢訳者がこれを「方所示現」と訳していることからそれは知られる。論者は *pranīhita-apranīhita-cetovitarkeṇa pratibimba-citrikāratā* にたいして時には「決定された、或いは決定されなかった心の尋（思考）によって影像を描写すること」と訳し、時には「……集中された心、或いは集中されなかった心が尋をともなって……」と訳しているが、後者に統一すべきであることは漢訳の「或由定心、或不定……」（定心は三昧における集中心）からも明らかである。論者の解説はいま一つ明瞭性を欠いているが、この節の論述にはきわめて興味深いものがある。

第二章第一節：遍行の心所法（すべての心と伴う心作用）のうちの「触」を取り扱っている。『瑜伽師地論』では、触は感覚器官と対象と意識の接触（根・境・識の和合）と定義していたが、AS では、根・境・識の接触そのものとは別個な心作用で受（感覚）に根拠を与えるものである、と定義している。前者は経量部的な見解であり、後者は有部の見解である。したがっ

て AS はこの問題では有部と同じ意見をもっている。世親は『俱舎論』に注釈を書いた段階では、経量部にはこの両説がともにあった、といているが、『大乘五蘊論』を書いたときには明らかに触を三者の和合とは別体としている。論者は、このことは『俱舎論』を書いたときには世親は AS を知らなかったが、後に瑜伽行派に転向して『大乘五蘊論』を書いた時には AS の見解に組するようになったことを示して、世親の思想の発展過程をも反映するものである、という。この問題を処理するに際し、論者は『俱舎論』『大毘婆沙論』『成唯識論述記』その他の論書を渉猟して、きわめて示唆する所の多い結論を導き出している。

第二章第二節：五別境（欲・勝解・念・三摩地〔定〕・慧）のうちの念と三摩地とを関連した二つの心所として扱っている。AS では念の定義において、記憶したことを忘れないことという有部にも共通する規定のほか「散乱しないことを働き（作用）とする」という規定を付加している。ASBh の校訂者である N. Tatia 氏は安慧の『三十頌釈論』と ASBh との相似点を多数あげて ASBh が安慧の著作であることを主張したのであるが、その際にも ASBh も念の定義にこの同じ不散乱性を付加していることを含めている。論者はさらに、AS 以後において念の定義に「散乱しないこと」を付加している論書は ASBh、『三十頌釈論』『大乘広五蘊論』といういずれも安慧作といわれるもの以外には存在しないことを確認した。AS の三摩地の定義は「観察されるべき事柄について心を一つに集中すること」であるが、この「心を一つに集中すること」は ASBh においては「散乱しないこと」と言い換えられている。論者は、AS、ASBh の伝統においては、心の不散乱を作用とする念はそのまま三摩地という体の用に他ならない、という。

第二章第三、四、五節：論者はこれらの数節において善法心所、煩惱法、随煩惱法のうちの幾つかの心所を取り扱って、AS の『俱舎論』と相違する見解を解説し、またとくに『俱舎論釈疏』(AKBh) において有部と異なる他者の見解として記されているものが AS の解釈と一致することに注意している。第三章では心不相応行（心と伴わない言語的・論理的・生理的な諸法）のうち得・無想定と滅尽定・無想果・命根・四相（生・老・住・無常）・名・句・文について論じている。いずれの場合にも有部はこれらを実体 (dravya) として扱うが、『俱舎論釈疏』のなかの有部への反論者はそれらを仮設 (prajñapti, 概念的仮説) とする。論者は、この反論者の立場と一致して AS もそれらを仮設とすることを論定している。第四章では、有部は無為法として虚空・択滅（涅槃）・非択滅（縁の欠如のために存在はするが永遠に現象しないもの）の三種を認めたにすぎないが、AS はこれに善法真如・不善法真如・無記法真如・不動・想受滅の五種を加えてすべてで八種の無為法を認めた。論者はそれらを解説して瑜伽行派の特異性を指摘している。第五章ではアーラヤ識の存在証明を扱っている。これらの四章においても本論文のメリットは少なからず認められるのであるが、いま論評を省略せざるを得ない。

第六章：論者がこの章において解説、展開している瑜伽行派の十二支縁起解釈は注目に値する。有部が十二支縁起を三部分に分ち、無明・行の前二支を過去世における現世の苦の原因

とし、識・名色・六処・触・受の五支を現世における苦という結果、愛・取・有の三支を現世において未来の苦を引き起こす原因とし、最後の生・老死の二支を未来における苦という結果と分類して、いわゆる三世両重因果という縁起の輪廻の解釈を創説したことは有名である。これに対して、瑜伽行派の十二支縁起解釈は二世一重の因果といわれる。ここでは無明から有に至る十支を現世（あるいは過去世）の煩惱と業とし、最後の生・老死の二支を未来（あるいは現世）の苦とする。そのさい『成唯識論』などの一般の瑜伽行派論書は十二支を四部分に分ち、無明・行を能引支分、識・名色・六処・触・受の五支を所引支分、愛・取・有の三支を能生支分（以上の三支分は現世）、生・老死の二支分を所生支分（未来世）とする。さらに有部・中観派・瑜伽行派を通じて行われる十二支の三分法でも、無明・愛・取を煩惱、行・有を業、識を含む残りの七支を苦とする。

しかるに、他学派はもとより、一般の瑜伽行派の諸論書とも異なって、AS は識を無明・行とともに能引支分に含め、また行・有とともに業のなかに分類する。これは AS が識を、無明（無知）に熏習された業（=行）が種子として心にとりこまれるその段階として考えていることを意味する。瑜伽行派にとって第三識支はアーラヤ識に他ならないが、その識は業の種子すなわち習気の潜む心なのである。

以上、本論文の主要部分である第一部研究篇の内容についての評価を述べてきた。しかし本論文全体を構成する各部分がすべて高い完成度を示しているとはいえない。いま紙白の余裕もないままに、単純な誤植に類するものを除き、論者の誤解・誤読に起因すると思われる誤謬の二、三を例証としてあげておく。ただし、それも主として第一部研究篇を批判の対象とし、第二部翻訳篇については一例を指摘するにとどめる。

1. 第一部研究篇における誤読・誤解

p. 10, 1. 6: *yathā niścayaṃ dhāraṇā* は前二語を *yathāniścayaṃ* と複合語として読まないという意味が通じない。同様に 13, 7 の *kiṃ lakṣaṇaṃ rūpaṃ* も *kiṃlakṣaṇaṃ rūpaṃ* とローマ字表記すべきものである。11, 13にある *samādhiviṣayo rūpaṃ... utpadyate* は校訂者が脚注にあげている異本の *samādhiviṣayarūpaṃ... utpadyate* を採用しないと意味が通じない。53, 7の *bhāvanā* は明らかに *bhāvā* の誤記である。71, 13 の *phaladānaṃ pratichadrāga* の *chadrāga* は *chandarāga* の誤植としても、*prati* は“*phaladāna* にたいする欲と愛着”という意味を表す不変化詞であるから、*chandarāga* と離して独立に表記しなくてはならない。

2. 第一部研究篇における解釈の誤り

57, 3-4: 「説一切有部では、滅を『煩惱を断ずること』である択滅と『永遠の滅、すなわち涅槃』である非択滅との二種に分けて……」という説明の中での非択滅の解釈は誤り。

70, 22-23: 「熏習という言葉は……無表業が種子をアーラヤ識の中に植えつけること」といい、また「AS における行支とは無表業を指し」というが、ここにおける無表業という

語の使い方には疑問がある。論者の説明も意を尽くしていない。

3. 第二部翻訳篇試訳における不適切な訳文の例

193, 22-24: 界は何故に十八種であるかについて、*dvābhyām deha-parigrahābhyām atīta-vartamāna-ṣaḍākāra-upabhoga-dhāraṇatām upādāya* という文を論者は「身体と具（身体に執する）の二によって、過去・現在の六種類の享受を保持する性質が理由で（界はまさに十八である）」という意味不明瞭な訳をつけている。しかし、ASBhによれば、*deha* すなわち身体とは六種の感覚器官のことであり、*parigraha* とは執着の意味ではなく、執着あるいは把握されるもの、いいかえれば六種の対象のことであり、*parigraha*「執着すること」が「執着されるもの」を意味し得ることは、*saṃskāra*「つくること」が「つくられるもの」の意味に転化するのと同じである。論者は論文篇において AS を解釈するさいにはつねに ASBh を参照していたのに、翻訳篇においては時としてその労を省略している。

もっとも以上の誤解はこの論文の膨大さ（A4判498ページ）に比すればきわめて僅かな数であるといえる。

総 評

AS のサンスクリット原典からの完全な日本語訳は学会でも最初のものであり、またその基礎のうえに書かれた論者の研究論文は今日まで未発見であった多くの事実を紹介し、有部のアビダルマに対する瑜伽行派のアビダルマの特異性を明らかにし、その思想的な意義を評価している。とくに論者は、瑜伽行派のなかでも独自の見解を展開している AS の立場を闡明するのに成功している。

よって本論文は博士（文学）の学位に相応しいものと認められる。